

# 古平のかむい

発行・古平町史編纂室  
古平町文化会館 842-2590  
第154号・平成14年7月1日

## 年表で読む 古平の歴史

《60》

浜町	製造石数 合計	五、六〇七石
製造業者 二入	清酒製造業者 一軒	三、八八七石

りました。  
明治四年頃の酒造業者  
一五人  
濁酒製造業者  
一五人

佐兵衛・港町・高橋仁太郎・新  
地町・若竹深蔵・同・古川平内  
五軒の酒造店で一、〇九五石  
製造したとあります。

明治二二年、新地町・熊谷商店  
が酒販売の広告を出しています  
が、値段は一升六錢から六錢  
八厘となっています。

明治四五年、第二回北海道清  
酒品評会で、古平から出品した  
酒が入賞しています。

明治四五年、第二回北海道清  
酒品評会で、古平から出品した  
酒が入賞しています。

■清酒品評会で入賞  
沖村一・沢江村二・港町四  
新地町一六・丸山町一  
浜町三三・入船町二  
一等賞【金鶴】鎌田金蔵  
一等賞【王冠】鎌田金蔵  
三等賞【白梅】鎌田金蔵  
三等賞【清泉】本間礼太郎

△後の本間酒蔵店の醸造用の樽十  
しと【燐燐リリヨヨウラン】

△これまでの酒の製造は、自家  
用をかねた零細な業者がほとんど  
で、酒造税が増税されるよう  
になると廃業してしまいました  
が、その後、また次の五人が酒  
の製造を始めました。

浜町・高野常吉・沢江村・武藤

### 漁業者の定住と醸造業

#### ■アイヌと酒

アイヌの人たちは大変酒を好  
んだと言われますが、古い時代  
には酒というものを表す言葉は  
なかつたそうです。和人と交易  
をするようになってから、酒の  
ことを「トノト」と言うのは  
「殿様の乳」ということで、も  
ともとのアイヌ語ではないとも  
言われています。

#### ■漁夫の定住で売り上げ急増

和人と交易をするようになっ  
てからは穀物類も栽培し、アワ  
(粟)・ヒエ(稗)・キビ(黍)  
などから酒を造っていて、釧路  
や十勝地方には「酒つくり歌」  
とか「酒絞り歌」というのがあ  
るそうです。

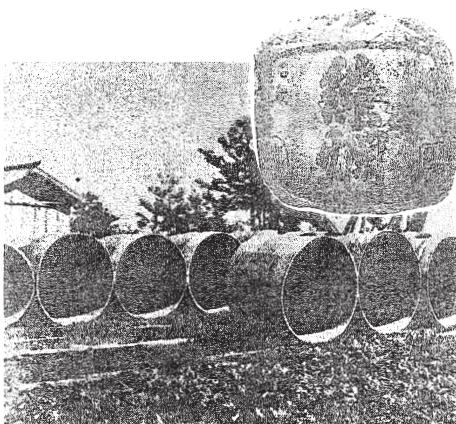
米で造った酒の味を知ると、  
濁酒製造を始める商店が多くな  
りました。

獲物と酒を交易することが多く  
アイヌの人たちは濁酒(ミネコ)を  
造り、何か儀式があるとお祝い  
として飲むことが多かつたよう  
です。

また大正時代、港町の丘の上  
に住んでいたアイヌの夫婦は鮭  
漁期になると甘酒を造り、浜に  
下りて来て、漁夫などを相手に  
それを売っていたという話を聞  
いたことがあります。

#### ■新たに酒造業が始まる

これまでの酒の製造は、自家  
用をかねた零細な業者がほとん  
どで、酒造税が増税されるよう  
になると廃業してしまいました  
が、その後、また次の五人が酒  
の製造を始めました。



（大正一〇年）

3/4 店の方も三人では廻りきれない程の忙しさだ。美國からの客が多かった。現金一〇〇間、貸売り一、六〇〇合計一、八〇〇間も出た。こんなに出るとは意外だった。一日中忙しかった。夜、帳簿の整理やら手紙を書く。

3/8 快晴珍しいような好天氣だ。町中鮫漁の活気でなふれている。店の方も相変わらず忙しい。タラ繩の道具も入つて来たので取りに来てもらう。

3/9 渔期も近づき朝早くから客が来る。朝食を食べる暇もない。午後二時頃ようやく一息ついた。入船町の種金からワイヤー、ロープなどの値段を聞くに来た。せいぜい勉強して、追々建網の方へも活動せねばならぬ。

3/12 鮫漁期も切迫したので、町中、皆が忙しそうだ。午前中は近来になく暇であった。午後一時から役場で、果樹栽培の話があり聞きに行く。リンゴ病害虫に打ち勝つべく、努力するよう話があった。リンゴは手入れさえ良ければ確かに有望な作

物である。樹数を減らしても手入れが第一という。

3/15 吹雪で時化。また寒中の中のようだ。今朝第二回目の鉄道踏査隊が出発した。地元から一五、六人、仁木村軍人分公や、青年団員八人も案内役で同行したそうだが、この天氣ではなかなかゆるくないだろう。

3/16 起床六時。間もなく早々にロープや綿糸の客が来

## 高野名幸作さんとの日記から



【55】

いるように思う。一五日の夜半が来的。ロープはほとんど専売のようなのでよく出る。なかなか面白いので、今後も多く仕入れみたい。客の話では沖村の方

で初鮫一尾獲れたとのこと。綿貰う。佐渡からの米山丸が荷物を二〇個ほど積んで小樽に入り、今日、古英丸がその荷物を積んで来た。

3/24 六時に起床、板戸を開けると雪が積もっている。雪かき、庭の掃除をする。雪が降り寒さも強く寒中のようだ。こんな空の鮫場も珍らしい。浜に出て見たが浜は賑やかだ。聞けば歌葉山中で四一〇杯△崎長が

る。朝食も一〇時頃一日中暇な糸相場はますます下落。目下の客があり忙しかった。晴れてきたようだが風が強く、一日中寒かった。今日はボイル油の客が二〇数人も来た。函館から大漁祈願の神樂を舞う人が来ていいたが、今日は②困支店でやるというので、早くから見る人でいっぱいだ。

3/23 昨夜來の吹雪はようやく止んで、今朝は快晴の天気だ。戸外は一面の銀世界。雪も一尺以上積もりまるで真冬だ。鮫場らしくない。今朝人の話では

ようだ。古平では、昨夜は時化のため建網は投網しなかつた。刺網は、入船町方面で少し刺したら一、三本あて獲れたといふので浜は大いに沸いている。

3/18 今日は朝早くから客が来的。ロープはほとんど専売のようなのでよく出る。なかなか面白いので、今後も多く仕入れみたい。客の話では沖村の方

で初鮫一尾獲れたとのこと。綿貰う。佐渡からの米山丸が荷物を二〇個ほど積んで小樽に入り、今日、古英丸がその荷物を積んで来た。

3/24 六時に起床、板戸を開けると雪が積もっている。雪かき、庭の掃除をする。雪が降り寒さも強く寒中のようだ。こんな空の鮫場も珍らしい。浜に出て見たが浜は賑やかだ。聞けば歌葉山中で四一〇杯△崎長が五、六杯沖村方面も少し、刺網は一般に良い。つぶ買いの汽船三隻、発動機船が一〇数隻入っている。実に港は景気づく。夜は

静かだが寒い。

3/25 雪が降り積雪も多く、まるで一月中頃のようだ。鮫の獲れ具合を見ると春が来ていい

3/17 夕方、浜へ出て見たがナギているので初めて刺網を入れたようだ。例年より雪解けが遅いので、鮫漁も少し遅れては余市では生鮫の輸送で戦場の

や岩内方面では全く音なし。古平、余市では全道の初漁だ。店の方も忙しい。合羽（がっぽ）ズボンの

売れ行きが良い。建網は皆無だが、刺網は今日も相当に掛かっただ。初漁としては近年稀な大漁だ。この分だと相当の漁があるだろう。

3/26 近ごろのこの寒さは近年にない。納屋にはまだ雪が四、五尺は積もっている。いつ消えるのか。これでは筈目や数の子干しもできない。夜になりまた雪が降り、風も強くなり網を揚げた。こんな寒い雪の多い鮫場は未曾有のことだ。

3/29 昨夜からの模様では大漁ならんと思い浜に出て見る。沖村・丸山岬の方だけ獲れたとのこと。刺網も相當に掛かる。

3/31 春景色になってきたが鮫漁なし。たら大漁銀行の帰り元に寄り大謀のことなど聞き参考になる。

4/1 鮫漁があるだろうというので、四時頃から町を通る人たちでガヤガヤしている。五時頃には鮫がなかつたというので帰る。鮫漁も初めは良かつたが、この頃は一向にない。雪も多かつたし寒さも強く、春らしくないからまだ悲觀することはない。岩内、古宇方面では一尾も獲

れないという。今日は学校の入学式がある。

4/2 ダシ風が吹いて暖かく、道路の雪も消えたが道が悪い。鮫漁もないのに浜町も活気がない。内地からの平安丸が入港したが、風が強いといでのハシケ一隻分の荷物を下ろしただけで小樽へ行ってしまった。店の荷物は下ろさなかつたので回漕店へ行き談判した。

4/3 雨天。雪の消えるのは目に見えるようだ。暖氣が続き、日中は縁側で日なたぼっこができる程だ。明日から内地へ行く予定なので、身欠、数の子などの土産物を用意する。夜になり雨がますます強くなる。海は昨夜からの時化で建網はみんな揚げたようだ。

4/4 海は昨夜からの時化で建網はみんな揚げたようだ。が、鮫漁も鮫模様だと、いうので網を刺していったが、今朝は時化の中綱を揚げている。九時頃からダシ風が強くなり吹雪になる。浜ではこの時化で大騒ぎ。一五、六隻は無事に帰ったが、三隻が遭難、内二隻の七人は救助されましたが、入船町の上野さんの船が転覆し乗つていた三人は溺死したという。気の毒なことだ。沢江

4/5 昨日來の時化はなかなか止まぬ。陸では建網も刺網も皆氣をもんでいる。刺網の人たちは(※)二〇から三〇放(晏)し流してしまつたというので大騒ぎをしている。今日一日はこの時化では出られない。八割ぐらいいの人は網を流したという。残つた網も使いものにはならない。損害は全部で六千放三万円ぐらいか。小樽から田の店員が来ていろいろ話を聞いて行く。

4/6 一昨日來の時化はすいぶんひどかった。今朝はまだ時化の中、網探しに出る人がいる。帰つて来てからの話では、流されるやら、残つていたのもダンゴ状になつていて、よくても三分の一ぐらいが使えるかどうかと言つていた。網も昨日は二〇〇〇間、今日も五〇〇〇間出たが、大分値を引いて売つた。

4/7 昨夜の様子では、今朝は必ず鮫があると思って早く起きた。浜へ出て見ると皆無だ。こんなこともない。浜は元気がない。建網も刺網もこの分では大不漁だ。午後から美國へ視察に出かけた。群衆、厚苦も建網が入つていて、今日はナギなども網を揚げているがどこも惨憺たる有様で、半数は役に立たないだろう。七時頃帰つたが、この頃から雨雪に風が加わり、また時化になる。建網は網取りで浜は大騒ぎ。今夜もとうとうだ。

4/8 みぞれ混じりの雪が降り悪い天氣だ。いつまでも寒いぶんひどかった。今朝はまだぶんと漁もあつたと思うが惜しいことをした。今まで全部で四千石ぐらい、近年にない不漁だ。鮫を一五〇尾程塩蔵して佐渡へ送る。夕方、前浜辺りでは鮫模様があるというので騒いでいる。確かに静かで鮫でも来そうだ。確かに静かで鮫でも来そうだ。鮫を一五〇尾程塩蔵して佐渡へ送る。夕方、前浜辺りでは鮫模様があるというので騒いでいる。確かに静かで鮫でも来そうだ。

(4/9) 佐渡方面へ商用で旅行。次回は5/4から

\* 時代で違いますが、刺網一把(反)で一放、刺網一把の長さ五間(九メートル)

(続く)

# 私にとつての 異郷の地 古平へ

大澤文子



昭和二十一年の初夏、私ども一家は古平町の住人となつた。その頃町長だつた舅から、「長男だから古平へ：：」との招きを受けたからだつた。

私は新潟市に生を受け、第二のふるさと札幌に育ち家庭をもつた。子どもの頃から書くことに興味をもつていた私は、早く速、婦人俱楽部の中原綾子先生の短歌欄に投稿してみた。

手渡すを

ひと日悔いつつ夫を待ち居る

飾ることもなくそのままの気持ちをうたつたものだが、昭和十五年一月号に一等として載つていた。その下に〈賞金十圓〉とい出となつた。

その後、終戦も過ぎ満五歳、二歳となつた幼な子を伴い、私も一家は余市から定期船金華丸の人となつたのである。

不安な気持ちと、船酔いで声も出ない状態だつた。幼な子を抱え、これからどうなるのだろうと思つたとき、身の内のふるえを隠すことはできなかつた。

だが広々と果てしない日本海の岸壁に立ち、フーッと深く息を吸つたとき「ああここがわたしの『第三のふるさと』：：」と思つた。不安な気持ちもうそのように消え、全身をあついものが流れただつた。

海沿いに建つやや古めかしいが、がつしりとした二階建ての大きな家。ここに居を構えるのかと、ふと見上げた空に一点の輝きを見た。玄関には大戸があり、夜は太い門（ふな）でしつかり閉められる。漁場の名残りで山やまけぶり冷ゆるなか

積丹の

漁旗はためかせ船の入りくる

空気に馴慣れ海の遊びも覚え、長男は同い年の子どもたちと砂浜を跳（はね）で駆けめぐり、日焼けして逞しく育つてくれたのだった。子どもたちも日に増し古平の子どもたちも日に増し古平の子どもたちも日に増し古平の

子どもたちも日に増し古平の空気に馴慣れ海の遊びも覚え、長男は同い年の子どもたちと砂浜を跳（はね）で駆けめぐり、日焼けして逞しく育つてくれたのだった。子どもたちも日に増し古平の

しんしんと  
むせかへる海霧ひろごりて

影のごと見ゆ網運ぶ漁夫

両の手の

指まさぐりて点字読む

幼な盲児に涙すわれは

また、つれづれに築港を訪れたとき、帰つて来る助宗船をうたつたのもその頃であろう。

道新の芥子沢新之介先生選、中山周二先生選にたびたび投稿する機会をもつたのもその頃であろう。

ふれ、楽しく日々を送るようにこへ勤務することになった。後に軍隊から戻られた本間寅雄氏も、しばらく夫と共に事務員として勤められた。



その頃、古平橋の近くに、花柳流の師匠片石先生がお稽古場をもつておられると聞いた。早速、一歳の長女をお願いした。柳流の師匠片石先生がお稽古場をもつておられると聞いた。早速、一歳の長女をお願いした。

何人かのお弟子さんたちにまじり、小さな足でトン、トンと片足ずつ床を鳴らし、懸命に覚えようとしている幼な子をいじらしく見守つていた。程なく片石先生は余市の方へ越して行かれただきいたが、現在でもお元気との由、人伝てに聞いた。懐かしく、一度お伺いしてお礼を

と思つてゐるが：：。当の長女にその頃のことを話すとぜんぜん覚えていないと言う。まあ五十余年のことなので、当然、

記憶はないのである。

「ありがとうございます」私は心の中でつぶやき、そつと築港をはなれたのだった。

## 忘れ難い浜鍋の味

富山市 高橋 藤藏  
(元・稻倉石鉱業所勤務)



「古平の夏」と云えば、決まって『浜鍋』を思い出します。私が稻倉石鉱山に転勤した昭和三十七年の夏のこと。

「明日、海に行こうか」と、友人に誘われ、金槌のくせに海が大好きだった私は、即座にOKした。

翌日、水泳用品をバッグに詰め、今や遅しと待っていたところに、友人が小型トラックに乗つて迎えに来てくれた。

稻倉石を発つた車は、古平・アメリカ過ぎ、人家のないデコボコの道をすすみ、道路を外れた草むらに停車した。

友人は大きな荷物を軽々と背負い、草に埋もれた獸道のよう細い道を、雑草を搔き分けながらや否や、ベタ屈ぎの海に飛び込み、潜り込んだ。

残された金槌の私は、水族館を上から眺めているような透き通った海に、恐る恐る入り、初めてトゲトゲのウニを手づかみにした。

何回か潜りを繰り返して戻つて来た友人の網袋には、ウニとアワビとグロテスクな黒い魚が一杯入っていた。

積丹は『豊富な海の宝庫』といよいよ浜鍋づくりとなつたのですが、何にも知らない私はただ見ているだけ。

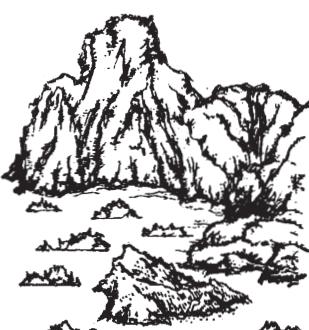
聞いてはいたのですが、まさにその通りだつた。

いよいよ浜鍋づくりとなつたのですが、何にも知らない私はただ見ているだけ。

崖下は三方を崖に囲まれ、岩が点在する狭い入り江だった。

勿論、人影はなく、この地形と海を知る通でなければ、到底知る術もないであろう『一握りの秘の入り江』だった。

滑る足元を注意しながら浜辺にたどり着き、いよいよ海水浴となつた。



仕草の全てが男性的で豪快で原始的にさえ見えた。

煮えるのを待つ間に、生アワビ・生ウニ、焼きアワビ・焼きウニを喰べさせてくれたが、高級料亭でも味わえない豪華な味に、大尽・大満足を満喫した。

鍋の煮え立つ匂いが漂い、空腹の虫が鳴り出す頃、いよいよ男一人だけの『浜鍋』の食事となつた。

熱い汁をすする。獲り立ての海の幸がかもし出す味は天下一品。高価な貝が鍋の中で所狭しと踊っている。貝の味も抜群ならば、その味をタップリ含んだ野菜の味も抜群。

浜鍋は、上品な味というよりも、豪放な『積丹の海が生んだ土着の味』と云つた方がピッタリだった。この時の味が忘れられず、稻倉石鉱山に勤務していた七年間は、七月・八月の日曜日毎に海へ日の出が続いた。

あれから早や四十年。今夏は、古平へ行く機会がありそうなので、浜鍋を満喫出来る日を待つてゐる昨今です。

工藤	上野	木村	上田	永井	金木	山田	山田
----	----	----	----	----	----	----	----

小学和明

佐藤

木村

平

村上

工藤

熊野神社

觀音淹

村上

から専業農家へ転換する人も多くなりました。

半分の七六町歩余りになつてしまいました。

野呂

水田への転換  
と開発が進む  
また、灌漑構組合も結成されて  
リンゴ畑から水田へ、

水利も豊かになり、新田の開発がいつそう進みました。

方正方生　水田作付の面積が  
三反で収穫高四石（六百石）で  
したが、その後水田は急速に増

え続け、大正の末には約二二町歩と三〇数倍にもなり、一三三一石（約三五トン）余りの収穫を

あげました。これは反当り一・  
一石（三一五キロ）になり、当

時の全国平均の反戻り收穫量二  
九一キロを上回る成績でした。

には一二三町歩と、古平町の最盛期の作付け面積に迫る勢いで拡大していきました。

浜町の市街を出るともう水田が一面に広がり、秋には見渡す限りの黄金の波が、町の、沼田の

限りの黄金の源が打ち 昭和三〇年代には品種の改良や、耕作技術の進歩などもあって、六〇

○トンを超える収穫をあげた年もありました。

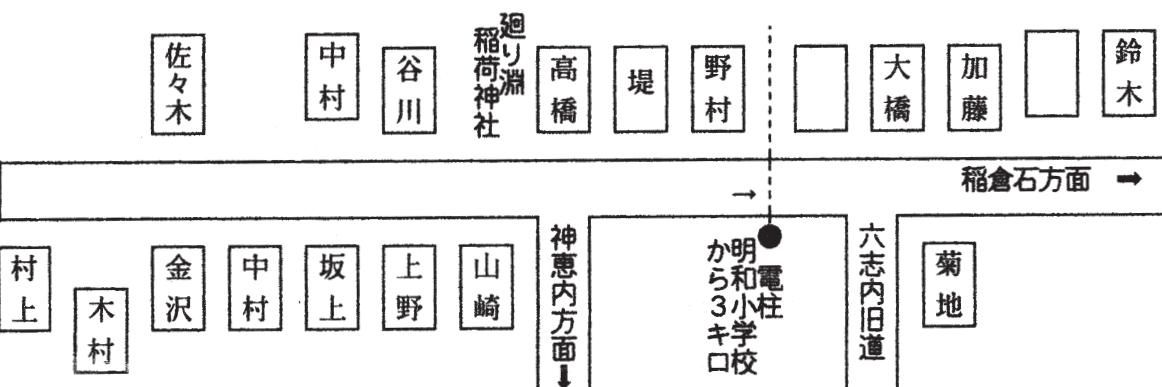
農家戸数と水田の減少 四〇年代から年々水田が減り始め、五一年には最盛期の約



**統計數値の換算**

係を一変当た社和あ示図役時も会小こりしは立のの科学また家つ地を学校住せものて域描習のんの建おのきの5一でつり様直資・てますを。知る上です。大距離いる位置間隔は関係

# 明和小学校校下住宅地図



農業の古平の農業は、当始まり時の漁場で働く人たちの食糧自給のために始まつたと考えられます。三百年前の記録に「ところどころで粟(アマ)を作つてゐる」とあり、またその頃古平を検分して歩いた人の記録には、「古平は一般に地味がやせていて、農耕にはあまり適さない」というのがある反面、「古平川流域は土地が肥沃で平地も広がり、将来は百町歩にも及ぶ農地が開墾できる」というのもあります。

鯨漁で人  
稼ぎや移住して来る人が増え、  
そのまま定住する人もいて、人口も急激に増えてきました。

明治五年 一、四一六人  
一〇年 二、一三四人  
一二〇年 五二〇〇人  
三三年 五四三六人  
四〇年 七七六四人  
古平川周辺の開拓が進む  
明治六年、開拓使古平出張所に勤めていた関口利勝が退官して、浜町に近い古平川周辺の開墾をし、一般作物のほか

古平の農業は、当始まり時の漁場で働く人たちの食糧自給のために始まつたと考えられます。三百年前の記録に「ところどころで粟(アマ)を作つてゐる」とあり、またその頃古平を検分して歩いた人の記録には、「古平は一般に地味がやせていて、農耕にはあまり適さない」というのがある反面、「古平川流域は土地が肥沃で平地も広がり、将来は百町歩にも及ぶ農地が開墾できる」というのもあります。

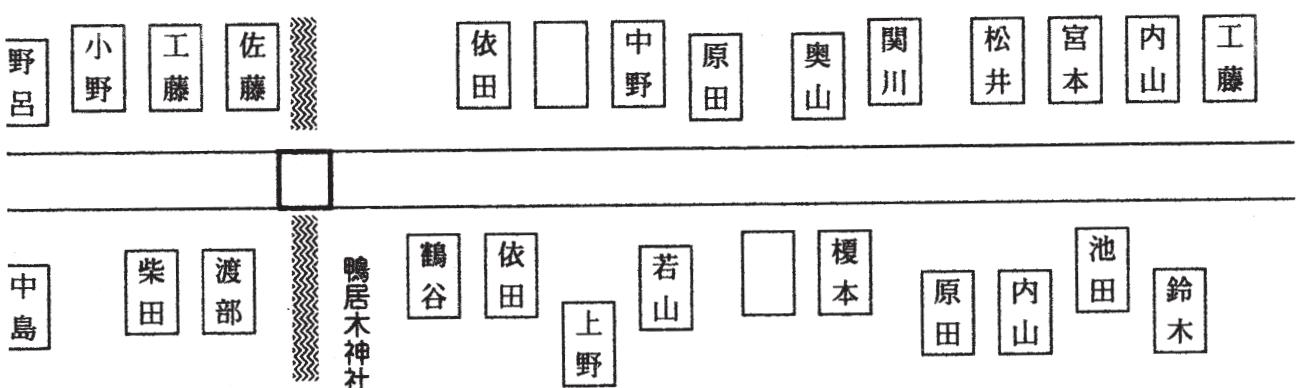
かリンゴの栽培が盛んでした。  
しかし、その後リンゴの病害虫の発生や、大正の末頃から米価の値上がりで水田に転換したことから、古平川流域一帯の平地は稻作地帯に変わりました。明治四二年の統計では、全戸数一、三四〇戸 (専業・副業の合計) 農家戸数一八九戸 (四・二三)

古平での稻作の始まり  
大正九年、道産米百万石達成の祝賀会があり、そのときの資料に次の記述があります。

「明治三四年、高橋與太郎・榎本傳内・千葉松之助の三人が、余市地方から品種不明の種子を持つて来て、三反歩を共同で試作したのが始まりである。」とあります。気候が寒冷のため、本州から持つて来た稻ではなかなか結実しなかつたようでしたが、その後も高橋與太郎が試作を続けていたようです。

農耕地も市街地周辺から、主として古平川やチヨペタン川流域へ広がり、それまでの副業へ

## 山紅葉古平平野は黄金色



## 木村シゲさんの語り

## 戦前の農家の暮らし

中

◇びんぼう暇なしか

その頃はどこの家もそうだつたけど、農家ではほんと暇はなかつた。

女人の人だと、朝、お日さまの出ないうちに起きて炊事。田植えの頃は昼の弁当も用意して、夕方は少し早く家に戻つて食事の準備。みんな仕事から上がつて夕食は八時か九時頃。食事の後始末をしてから針仕事や洗濯なんかもあつたし――。

そんな毎日の生活の中で樂みは、部落のなんか集まりか、季節の行事があるとき。やつぱり正月が一番面白いといふか楽しかつたね。

◇正月の楽しみ

今の時代からみれば、そんなことは何も面白いことでもないし楽しいことでもないが、昔はとにかく働くことしかなかつた

から、仕事をしないで少しでものんびりできれば、それだけでも良かつたもんだ。

正月は近所や知り合いが何となく集まれば、男同士でホービキ(宝引き)、姑たちはキンジヨコ(花札での遊び)、嫁つコたちも、このときばかりは負けないでホービキをやる。賭けるのはわずか五錢か一〇錢ぐらいだが、それでもキヤツキヤ言いながら大騒ぎだ。

男の人たちの中にはもうすつかり賭け事にはまつてしまつて、毎日でもやる人がいて、警察に連れていかれる人が何人もいた。浜でもちょうどスケソ時期だから番屋でバクチをして、警察に引っ張つていかれた話なんかもよく聞いたもんだ。警察が見廻りに来るもんだから、遊ぶ家を替えてやつたりしてい

◇正月はやっぱり食べること

暮れになると、それぞれの家で餅をついた。白い餅の外、ヨモギ、黒豆、アズキ、ゴマなんか入れたり、家によつてはイナキ(宝引き)、姑たちはキンジヨコ(花札での遊び)、嫁つコたちも、このときばかりは負けないでホービキをやる。賭けるのはわずか五錢か一〇錢ぐらいだが、それでもキヤツキヤ言いながら大騒ぎだ。

一年で一番のご馳走は年とりの晩だ。煮しめの豆腐やこんにゃく、凍み豆腐は家で作るが、油揚げは買って来る。豆腐もふだんは買えないでの、何かのお祝いのときしか食べなかつた。ワラビ、ゼンマイ、タケノコなどの山菜はいつぱい採つてきて

ふだんはこんな生活だから、せめて正月ぐらいはと、精一杯

のご馳走を作つた。なまますは二斗がめ(18リットル)に作つておい

て冬中食べていた。きんびらごぼうもどつさり作つて、毎日のようく食べた。浜の方から毎日、何人もいさばや(魚売り)が来るが買うこ

た。部落の中にはそれを警察に密告する人もいたけど、そんな人は仲間はそれにされてたようだ。バクチの好きな人は、仲間が集まれば通夜の晩でもやつてたよ。

正月、お祭り、お盆のときぐら

ばやそばねりなんか食べるときは、鍋にコンブを敷いて、みそ汁よりうんと濃い汁を作り、そこのままにして置き、上ずみをすくつてその汁をかけて食べた。焼き干しでだしをとり、それを使うといい味が出た(みそラーメンの元祖かも?)。

大謀で小サバが大漁して安いようなときには、一もつこ五錢か一〇錢で買って来たり、ほかに川で獲れるウグイで焼き干しを作つて歩いた。ふだんはこんな生活だから、せめて正月ぐらいはと、精一杯のご馳走を作つた。なまますは二斗がめ(18リットル)に作つておい

とはなく、川魚を食べていた。魚の煮つけもすべてみそだつた。魚の刺し身なんかはほとんど食べなかつたが、タコの安いときには、それを買って刺し身にして食べることはあつた。時々、米や野菜なんかと取り替えたりすることはあつた。

正月にはどこの家でも張り込んで（氣前よく）塩鮭を一本で買った。秋になると鮭が川を遡上つてくるので、それをつかまえて来て一〇本ぐらいは塩蔵しておくが、これは密漁だから隠しておく。だから正月になつて塩鮭を買うと、「オレの家は密漁なんかやつてねエ。」といふことを示すのに、買った塩鮭は玄関のよく見えるところに吊る下げておいたもんだ。

塩鮭はふだん食べることがないが、ついでに、うちのダンナは塩鮭を食べ残したりすると言つた。鮭はただ食べるだけではなく、頭から骨までみんな利用した。頭（氷頭ひづ）はたいてい

の家でやるがなますに入れる。頭の固いところや骨は叩いて細かくし、きんびらごぼうやみそ汁なんかにも入れた。

みかんも正月は箱で買う。

の中にみかんの空き箱でも並んでいれば、自慢してるように見えた。

正月に絶対無ければならないのはドブロクだつた。どこの家でもこればかりは四斗樽（一升びん）で四〇本分で造つた。ふだんでも少しづつは造つたが密造なので警察が調べに来る。家中匂いがしてすぐばれてしまう。それで物置や馬小屋、畑の小屋に置いたらするが、仕事の合い間にもイッパイやる人がいた。正月はどこ

の家に行つてもまずドブロク一杯。

味の自慢しながら調子づいてくる。

◇小 正 月

冬になると夏ほど忙しくない

ので、少しは季節の行事を楽しめた。七日は七草で、雑煮を食

べるのが普通だつた。

一五日は小正月で、やはり近所や仲間が集まつて遊んだ。特

別なものは作らないで、正月の

残り物や有り合わせのものです

ませた。人が集まるということはふだないので、やつぱり何

か楽しい日であった。

◇節 分

節分には（豆まき）をすると

いうところが多かつたようだ

が、そんなことはしなかつた。

お寺の寒修行があり、姑たちは

何日かはそれに参加する。姑が

いないというので（オニ？）の

いぬ間に、ということか）、嫁

たちが集まる。小さくて売りも

のにならないイモを煮て食べな

がら、おしゃべりが始まつた。

やはり姑の悪口を言い合うのが一

番楽しいようだつた。

◇ひ な 祭 り

もう少しすると、また忙しい

農作業が始まるというのか、ひ

な祭りにはご馳走を作つた。お

ひなさんの人形なんかは無かつたが、人形の描いてある絵紙を

壁に張つたりした。

その日はちらしずしを作つた。小さいがタラを一本買つた。雪の降りがけから春先の頃までは、よくわなをかけてうさぎを捕つたが、肉を食べるのはそんなどきぐらしがなかつたよ

うだつた。

（次号へ続く）

鶏の一〇羽ぐらいは飼つていたが、卵は全部売り物だつた。鶏の肉も食べるということはなかつた。家で病人でも出ると病人に滋養をつけさせるというの

で、鶏肉や骨のスープをとつて

たりしたが、家族は、骨を叩いて少し肉の入つた肉だんごを作り、それをみそ汁にして食べたがうまかつた。

鶏は放し飼いなので家の廻りのあちこちに卵を生み、それを探して集めることもある。あるとき、青だいしようが卵を呑み込むのを見たことがあつたが、何個かそこにあつた卵を全部呑み込んでしまつた。ヘビは別におつかなくはないが、そんなことがあつてからはヘビを見るといい気持ちはしない。その頃、卵は三個で一〇銭ぐらいだつた。

雪の降りがけから春先の頃までは、よくわなをかけてうさぎを捕つたが、肉を吃るのはそんなどきぐらしがなかつたよ

うだつた。

# 中戦

## 立派な漁場の体験談

## 戦後

吉野慶一郎

■故郷をしのび語り合う  
「今年は定山渓温泉で、私たちの会の総会というか懇親会があるんですよ。」という吉野さんのお話しでした。

樺太から引き揚げて来た人たちは、それぞれの地域の出身者で会をつくり、集まつてはかつての故郷に思いを馳せ、失われた故郷へのつのる慕情を語り合ない、強い団結心で結ばれている。

樺太から引き揚げて来た人たちは、それぞれの地域の出身者で会をつくり、集まつてはかつての故郷に思いを馳せ、失われた故郷へのつのる慕情を語り合ない、強い団結心で結ばれている。

無尽蔵とも思われた程資源の豊富だった樺太（サハリン）、その樺太で戦前から戦後にかけて漁業経営をされてきた体験、当時のソ連人と交流、ソ連領になつてからのソ連軍人との対応など、貴重な体験談をお聞きすることができました。

■故郷をしのび語り合う  
「初めは四百人からいたのが、今は半数の二百人ぐらいになつてしましました。」

一〇月にやるので、七月には案内状を出さなければならないということでした。古平町での会員は、亡くなられた阿彌豊作さん（北海道支部長）、野村丞次郎さんがおられたそうです。

西海岸にある真岡郡野田町で、人口は約三万六千人、周りは大森林で製紙（王子製紙）と漁業が主産業だった。市街地の大通りを製紙工場へ木材を運ぶ軌道でした。

一〇月にやるので、七月には案内状を出さなければならないということでした。古平町での会員は、亡くなられた阿彌豊作さん（北海道支部長）、野村丞次郎さんがおられたそうです。

■一家で発展途上の樺太へ  
私の家は今、「おうみスーパー」ということでした。古平町での会員は、亡くなられた阿彌豊作さん（北海道支部長）、野村丞次郎さんがおられたそうです。

■スケソ漁を始める  
野田では「吉野漁場」として漁場を持っていたが、ちょうど戦時中でもあり樺太でも物資が不足していく、漁業組会員でなければ資材の配給を受けられな

いというので、野田町漁組の組合員になつた。後に古平に引き揚げて来られた、阿彌豊作さんのお父さんの孫造さんが組合の理事を、また野村丞次郎さんが真岡地区の水産物検査員をしておられた。

その頃の古平でのスケソ漁は、品質の良いタラコを生産するため釣りが主で、二月までが大体漁期であった。二月末頃から刺網をやる人もいたが少なかつた。野田辺りは流水は来るが止着しないで、その日の風次第で岸に寄つて來たり沖へ離れたりと気まぐれで、うまく天候を見極めないと、延繩を全部流水に持つて行かれてしまう。それで樺太では三月から四月までが漁期で、スケソ漁が終わるといよいよ鮫漁だつた。

古平からは腕のいい船頭として、親父がかねてから目をつけ

樺太の鮫漁期は、古平周辺の鮫漁が終わる四月末から五月末まで、古平から漁場の人たち



→旧樺太略図

古平からは腕のいい船頭として、親父がかねてから目をつけていた山川武志さんを頼んだ。その頃、ぜひにと頼み込んで来てもらつた。三〇歳ぐらいだつた。

社歌

## 吉平町岬短歌会

父の背に高き石段数へゆき三山神社の鈴振りし日よ  
ふるさとの古平をこよなく愛したる一穂のみ墓は海見下ろせり

池田テル

分校に通ひし頃の道のぼるうぐひすの声聞くも親しく  
山径の脇のなだりを色どれり一輪草またカタクリの花

堀典子

早朝にウグヒスの声聞きながら小庭の花に水やる日々は  
この春の桜前線にさそはれて自然のサイクルスピードアップ

田中香苗



## 吉平ホトトギス会

新緑の背山とび立つ鳶の笛 斎藤波留

湯上りの熱りし頬や月おぼろ 山口悦子

鳶やパークゴルフの足を止め 越野敏雄

まだ人になじめぬ距離に雀の子 大和田絵伊

雲り空雄冬荒れそう秋の海 福井幸平

紫陽花は雨をもらいて変わりけり 関口勝志

よしざきり

鈴木時子

ひとりわたり草取り終へし前庭をゆつくり眺むる茶を入れながら  
窓を照らす海より昇る月冴えて砂留に寄する波白く見ゆ

竹内コト

風強く定置網の浮き乱れいて不漁をかこつ日日の続けり

丹後初江

昨夜冷えて花首垂れしチューリップ朝の日なか立ち直りくる

東美知

祝はれし薔薇の香居間に放ちけり 仲谷比呂古

移り住み今年は梅のなる気配 室谷弘子

編集 横木 雄紀

のようですが、ご期待に沿うべく、これでいいかと思案しているところです。

○せたかむいは4ページでスタートしましたが、W杯にも劣らない声援? があつてか体力増強、ファンも増えてきました。

○福井さんには第2号から110回を超える寄稿、懐かしい話題で楽しませてくれました。亡くなりられた高橋源吾さん60回続きましたが、その博覧強記ぶりには驚きました。高野名幸作さんの日記も、興味津々で待つてる方もおられます。現でようやく5分の1です。ページが好評

●木村シゲさんの一ページの順序が逆になつていました。

●古平のにしん漁、第2集は文化会館に置いてありますので、ご希望の方はお出でのときにもお持ちください。

# 古平町史年表

— 2 —  
264～287年前

□ 287年前 = 正徳5年・1715

◆松前藩の記録によると「フルヒラのアイヌにも  
粟(アツ)を作らせた」とある。

□ 286年前 = 享保年間・1716

◆古平場所は古くから岡田家の交易場所であった  
が、記録に残っているのはこの頃からである。

□ 283年前 = 享保4年・1719

◆西蝦夷での追い鯨漁が許されると各地からの出稼  
ぎ人が多くなり、請負人は出稼人から漁獲の二割  
を徴収した。これが「二八取り」である。

□ 271年前 = 享保16年・1731

◆津軽藩士が編集した『津軽統志』に、初めて  
「古平」と漢字で書かれている。「古平 新井田  
清兵衛 同清三郎 船二艘 人数二十五人」

□ 251年前 = 宝歴元年・1751

◆岡田弥三右衛門秀悦は、港町の山腹に恵比須神社  
(現在の厳島神社) を建て、事代主命(タシロメシバ  
ミコト) を祀る。

□ 246年前 = 宝歴6年・1756

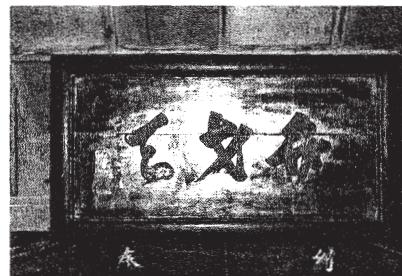
◆飛騨屋文書の中に「一、婦るびら地頭新井田喜内、請負人(記載なし)」とある。

□ 222年前 = 安永9年・1780

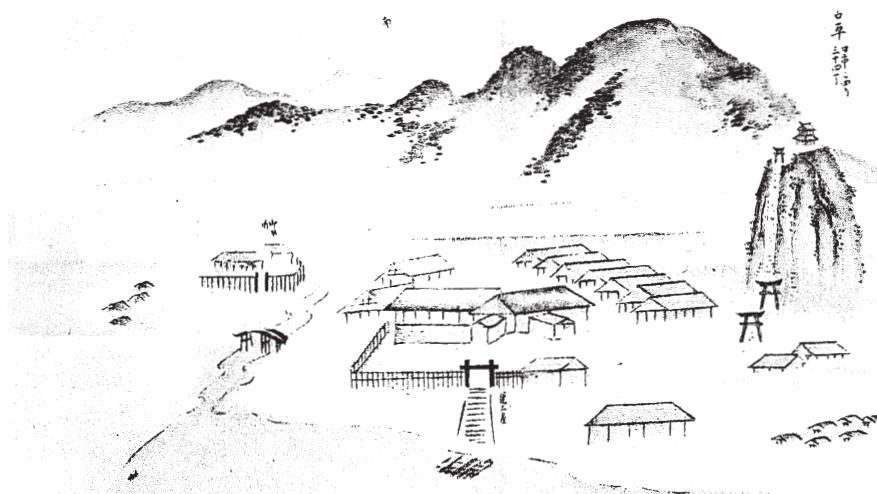
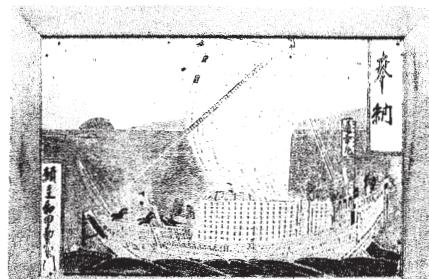
◆宮川家文書の中に「新田大三郎殿知行所、辺路加路石、古ひら、さるまき、出物法花、  
たら油、いり子、秋味有夏秋共運上金」とある。

◆佐藤玄六郎行信の『蝦夷拾遺』には「フルヒラ運上家一戸、海岸里数三里余」とある。  
同じ頃書かれた『西蝦夷行程記』に、古平には「運上家一軒、番屋二軒、鮭小屋三十四  
軒、アイヌ小屋六十六軒、通計百三軒の漁場」とある。

厳島神社社殿(弁財天)の掲額



奉納された北前船の絵馬



中央が運上屋の  
古平、右が倉庫、  
高いところに  
川を挟んで御用所(役所)  
(作成された年代は不明)